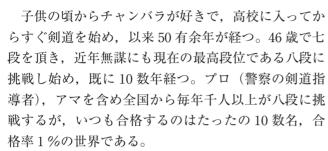
82 建設の施工企画 '08.1

ずいそう

無心

渡 辺 正



何事かをなそうとする時に無心になることほど難し いものはない。仕事においてもそうだったが、特に一 対一で相手と対する剣道においてはなおさらである。 まして昇段審査の場においては、9人もの先達(審査 員)の前で極度の緊張を強いられる中、全く初めての 人を相手に、審査員の目にかなう技(わざ)を出せる かどうかは、いかに「平常心」「無心」「無念無想」に なれるかに尽きる。逆の言い方をすると, 剣の四戒 (相手の風貌・高名風聞などに恐怖心を抱く"恐",全 く予期しない相手の構え・技などに驚愕する"驚", 相手がどうくるかと疑心暗鬼になる "疑", 相手の何 処を打とうか・どう応じようかと思い迷う"惑")を いかに克服するかにある。つい先日、警視庁現役の某 八段の先生に、アキレス腱縦烈の病み上がり後初めて 稽古をお願いしたとき、相手が打とうと手を上げかけ たその瞬間その小手を、2本目は同じく相手がこちら の面に打ってこようとした瞬間に相手の面を、それぞ れ無意識に打っていた。周りで見ていた八段挑戦者達 から, "なんだなんだ?", "今どうしたの?" と大騒ぎ されたが、本人は何も覚えておらず、勝手に身体が動 いた結果であった。これぞまさしく「無心」のなせる 技であったと思われるが、その後"あの時をもう一度" "あの時の気持ちで"と思うが二度とできない。そう 思うこと自体がすでに「無心」でなくなっている。 「無心」になろうと思うこと自体もすでに「無心」で はないのである。

「おのずから映らばうつる映るとは月も思はず水も 思はず」これは現代剣道の大本に繋がる新陰流開祖上 泉伊勢守信綱の歌であるが、無心、無念夢想の心構え



を説いたものである。 病気以外に生死の境に

生きることのない現代の凡人には、必死の修業を積んでもその心境に至れるかどうか。しかし、アマゴルフの名人中部銀次郎は、ショットの構えに入る前には色々のことを考えるが、いざスタンスを取ったときからはただクラブを振るだけという。その中部銀次郎があるとき、"世界のホームラン王"王貞治に、「バッターボックスに入ったときホームランを狙って打つのか」と問うたところ、「ただ来た球を振っているだけ」と応えたそうである。これぞ無心の境地であろう。現代でも超一流の人は、血のにじむ努力の末に、自然に無心の境地になれる何かを身につけているらしい。

「心こそ心迷わす心なれ心に心こころゆるすな」 (一つのことにとらわれたり、迷ったりせず、臨機応 変に動け)。「心とは如何なる物を云ふやらん墨絵に書 きし松風の音」(声なき声を聞き,裏にあるものを読 め)。「立ち向かう時の心は明月のくまなく照らす姿な りけり」(相手を高みからあるがままに認めよ)。これ らは今後の修業の糧としたい歌である。幸いにも「好 きと巧上手と三つくらべれば好きこそ物の上手なりけ り」という。「大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登 る道はありけり」を信じて、幕末の西郷隆盛と勝海舟 の会談を取り持って江戸城無血開城のお膳立てをし, かつ、明治天皇のお側にも仕えた山岡鉄舟(幕末三舟 の一人, 一刀流の流れをくむ一刀正伝無刀流の開祖) が、参禅し富士山を眺めて大悟したという、「晴れて よし曇りてもよし富士の山もとの姿はかわらざりけ り」(雄大にそびえ立つ富士山は、過酷な自然の中で 何が起ころうとも元の姿は変わらない。人も日常生活 において如何なる誘惑にも負けず、どのような欲望に も惑わされずに泰然自若として過ごす姿を歌ったも の) の境地に少しでも近づきたいと念願している今日 この頃である。

──わたなべ ただし 元標準部長──